

## ユートピア実験としてのフッター派財産共有制

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済研究所 公開日: 2009-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉塚, 平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/1797">http://hdl.handle.net/10291/1797</a>

# ユートピア実験としてのフッター派 財産共有制\*

倉 塚 平

フッター派ゲマインデが、モラヴィアのフス派貴族の寛容政策の下、はじめて自由と繁栄を享有するに至った1569年、その年代記者は誇らしげに次のように記した。

「要するに、ここでは怠惰な者は誰一人いなかった。各人は命じられたこと、自分がなしうることを行った。以前、貴族であれ金持であれ貧乏人であれ、そうであった。ここに加わってきた聖職者も労働することを学んだ。」

「ここに来たすべての者は共同の同じ利益のために労働し、誰か他の者が困っているときには、直ちに救いの手を差しのべた。それは生きて働く各部分を持ち、たがいに奉仕を必要としている完全なる身体以外のなにものでもないのである。」

「それは時計の精巧な業にも似て、各々の歯車や部品は他の物が動くのを助けて、全体の目的に奉仕するのである。それはまさしく有益な蜜蜂の群にも似て、彼らの共同の巣箱の中で共同労働をし、あるものは蜜ロウを他のものは蜜を、またあるものはおいしい水を運びこみ、甘い蜜をつくるすばらしい労働を行う。だがそれは、自分たち自身のためだけでなく、それを必要とする人々と分ち合わんがためなのである。かかるものがここにはあるのだ。」

---

\* 本稿は1997年10月25日、アメリカのアトランタで開かれた the yearly Conference of Sixteenth Century Studies Society で要約し発表したものである。

だから、万事にわたって秩序が導入されなければならない。なぜなら、よき秩序の中にこそ事物は存在し、遂行され保持されるからである。とくに神の家においては、主御自身が職長であり規律正しい配膳係なのである。秩序のないところには混乱のみがある。神が住み給わないところ、その家はバラバラに崩壊する。」(AC 435~436)

この長々とした引用を聞く人は、たとえフッター派についても知らなくても、これはまさしく典型的なユートピアの記述だと思うことであろう。しかし不思議なことに、地上におけるユートピア実験としてフッター派財産共有制を正面から捉えた研究はない。以下、私はフッター派成立前後に描かれた二つの古典的ユートピア、トーマス・モア『ユートピア』(1516年)とトンマーズ・カンパネッラ『太陽の都』(1602年)と対照しつつ、いかにフッター派がユートピア的性格を強くもっていたかを明らかにしたい。

## I

ユートピアは現実空間から遮断された閉鎖的空間に設定される。なぜか。自然科学者がある事物の因果関係を究明しようとするれば、外部からの攪乱的影響を排除するために、対象を孤立化しなければならない。それと同様にユートピア思想家が人間ならびにその諸関係の詳細な分析と総合を通じて、あるひとつのまとまった国家についての願望像を描き上げるとき、その国家を構成する諸要素が外界の影響を受けて崩れ去らないように、ある孤立した閉鎖的空間の中にユートピアを設定しなければならないからである。かくしてユートピアはハンス・フライアーの言葉によれば、「政治的孤島」として象徴されることになる。

モアは、「ユートピア半島」を掘削によって大陸から切離すことから物語を始める。カムパネッラは、インド大陸で蕃族により迫害された賢者たちが、

セイロン島に逃れ、広大な人跡未踏の大草原の真只中に立つ高い岡に七つの城壁を樹立したことから『太陽の都』の物語を始める。

フッター派もまた然りであった。だが前二者が思考実験によっていとも簡単に彼らのユートピアを閉鎖的空間の中に設定したのに対して、フッター派の場合、聖俗諸権力による恐るべき迫害の下、多くの犠牲を払ってそこに到着するのである。1525年1月ゲマインデ宗教改革運動が絶頂に近づきつつあったとき、再洗礼派運動ははじめてツヴィングリのラディカルな弟子たちのもとに生じた。だがすでにこの時、この市周辺の農民の十分一税反対運動を支援したために、ツヴィングリと市政府によって孤立させられてしまっていた。ところが間もなく彼らは、村落共同体の教會的政治的自治を要求して立上がった南ドイツ・東部スイスの広汎な農民と結びつき、その再洗礼主義は彼らの間に拡まっていく。彼らは間もなく新しい世が来るであろう、そこでは福音に合致した隣人愛が実現されるであろうという希望に満ちた祝祭的気分の中にひたっていた。そして彼らの下にはアナーキスティックなユートピアンも現れた(HB53)。チューリンゲンの市民や農民は今ここに千年王国が出現するであろうというミュンツァーの期待に駆りたてられた。とはいえこの時点では、再洗礼派や農民は、全体としては現世的な、スイス志向的改革に向かっていった。

だが希望に満ちた春は短かった。至る処で蜂起した農民軍は撃滅され再洗礼派を含む多くの参加者たちは追跡され残忍にも処刑された。かかる絶望的状况の中で再洗礼派は決定的な現世拒否、現世逃避へと駆りたてられることになる。かくして生じたのが Gemeinde-Welt-Dualismus である。ミカエル・ザトラーはいう。「この世とすべての被造物のうちには、善と悪、信仰と不信仰、暗闇と光、この世とこの世の外にある者以外のものは存在しない。…われわれにとって主の命令は明らかである。わたしたちが悪しきものから分離することである。」(『シュライトハイム信仰告白』)

彼らはこの世に住みながら、成人洗礼の見えざる壁を張りめぐらすことによって、この世と分離せんとしたが、この世は見えざる壁を易々と通って容易に彼らを逮捕し拷問し処刑した。それゆえ約束の地、ユートピアのトポスを求めざるをえない。幸運なことに、「この世の荒野に住むために神の子羊の花嫁には、ある土地が与えられた」(GZ. 224)。フープマイヤーがモラヴィアのフス派領主の許に避難所を求めて以来、様々な再洗礼派がドナウを下ってモラヴィアにやって来た。それらの群の一つが、主として南チロルからやって来たフッター派なのである。

## II

この世にユートピアを樹立するためには、カリスマ的人物が出現し、彼に対する信奉者たちの人格的帰依を通じて支配を行使することが無条件に必要である。なぜなら、内面からする徹底的な変革なくして、ユートピアのドアは開かれないからである。モアの場合、ユートプス王がユートピア島を占領したとき、「荒っぽく粗野だった民衆をクルトゥスとフマニタスという点で今日ほかの殆どすべての人間に優るところまで導いた」というが、半島切離労働に島民だけでなく自分の兵士たちもこの作業につかされたことで心服をかちえたという以外になんの記述もない。カムパネッラでは、最初から賢者の群が逃げて来たので、問題にもならなかった。

ところで、リヒテンシュタイン侯領に亡命した再洗礼派の間では、絶対無抵抗かどうかで対立が生じ、無抵抗派はアウステルリッツに移るが、その途上、プリミティブな財産共有制を行うことになる。だが彼らは安住の地を得るや、忽ち宗教的倫理的緊張感から解放され、また有能な組織者がいなかったため、財産共有制は有名無実に等しい状況になっていた。(C. A. Cornelius, *Geschichte des Münsterischen Aufruhrs* II. S. 257)

だが南チロルからやってきた再洗礼派は全くこれと異なっていた。ヤコブ・フッターのおかげである。彼のある信徒は裁判官や陪審員たちの前でこう語っている。「ヤコブ・フッターの言葉は強力である。なぜなら神が彼を通じて語っているのであって、彼が自分の肉から語っているのではない。」また彼は次のようにいっている。「十二使徒の一人聖パウロと自分たちの最長老の教えは同じものだ」(ÖR III 22)。フッター自身、彼の様々な手紙に見られるように、神が彼を選び送り給うたので彼の言葉は彼のものではなく神の言葉であると確信していた。彼が深夜チロルの山の中でかがり火に照らされながら信徒たちに語る説教は強烈な迫力を持っていた。受洗者に対してこういっている。「今や汝の罪は神によって赦された。汝は肉と血を、妻と子を拒み捨て去れ！」(ÖR III 166)。激しい弾圧を逃れるため、フッターもその群をモラヴィアに移すことを決意した。そのためには資金を必要とする。彼はこう説教したと捕われた信徒は告白している。「すべてのものはお互いのものである。もし誰かが千グルデンもっているならば、それを兄弟たちとわかち合わなければならない。そうしない者をわれわれの間で許すわけにはいかない。もし1フィアラーでも持っており、それを黙っているならば地獄に陥されよう」(ÖR III 92)。これがフッター派財産共有制の発端をなす。

フッターのこれらの激越な言葉は、信徒たちの心を刺し貫き全身を感動で震えさせた。この世のあらゆる価値は無となってしまった。ある青年は裁判官の前で次のように告白している。「天国にいる聖者たちは、われわれと同じである。御言葉のために受難したのだから」(ÖR III 161)。かく徹底的な回心を遂げた老若男女の群が、フッターの指示によりモラヴィアのアウスピッツに居を構えていた南北チロル出身の再洗礼派ゲマインデに系統的に送りこまれていく。1533年8月フッターもそこに到着するが、それから3ヶ月間は北チロル出身でこのゲマインデの長老であったシュッチンガーから権力を奪取する激しい闘争が展開された。神的召命を確信しているフッターにとっ

てゲマインデのルールなど問題にもならなかった。幾多の死地を潜り抜けてきた鋭い第六感によって、遂にシュッチンガーの隠し金を摘発してこれを追放し、これまで二人の指導者の間で動揺していたゲマインデに対する全一的支配権を獲得する。自我意識の強い信徒たちは去っていった。残る大多数の信徒たちはすっかり彼のカリスマに圧倒され心服する。

南チロルの信徒たちに送った彼の手紙は、キリストと自分とを区別できなくなるほど喜びに興奮きった様をよく伝えている。「少なからざる多くの者が人間の霊と恣意的な人間の命令によって縛られていました。彼らの心と良心は長い間、偽の牧者たちによって重荷を負わされ混乱し、悩まされてきました。これらすべての人々をキリストは解放されました。彼らを憐み、軛から解放し、今やキリストは彼らの先頭を切って歩かれています。小羊たち神の従順な子どもたちは彼の声を聞いてみんな喜び、彼に忠実についてきています。なぜなら、彼らの牧者であり王であるキリストの声を知り服従しているからなのです。」(AC133)

だが彼の狂気に近い自我の拡大は、遂には彼の死をもたらすことになる。1534～35年のミュンスターの再洗礼派千年王国の出現は、新旧聖俗諸侯に大きなショックを与えた。モラヴィアの貴族たちにもオーストリア国王フェルディナントの命令が発せられ、即刻、再洗礼派の領内立退きを要求した。vogelfrei となったフッター派も行くあてもなく荒野にさまよい出たが、これを偵察に来た地方長官の家来に対して、フッターは国王に対する怒りを爆発させ、「残虐な人殺し」と呼び、地方長官あての手紙では、「国王フェルディナント、残忍なタイラント、神の真理と正義の敵」と書いた。この手紙を渡した瞬間、彼はみずから惹起した新しい現実に気付き、後継者にハンス・アーモンを指名して万事を託し、南チロルめざして落ちていった。だが激怒した国王の命令でいたるところに網が張られ、遂に捕らえられ恐るべき拷問を受ける。彼もまた人の子であった。彼を匿っていた村の同志たちの名を遂にも

らし (ÖR III 325), 彼らもまた処刑されることになる。1536年2月インスブルックでの彼の焚刑は凄じいものがあった。鉄の轡をはめられた彼は一語も発することなく身もだえしつづ果てていった。

### III

ユートピアは閉鎖的空間の中に置かれた自己完結的体系として存在する。ユートピア思想家は非合理と矛盾に満ちた現実世界と対照的に、あらゆる社会的因果連関を計算し抜き、あらゆる事態を予想しつつ、ユートピアを一個の完璧な合理的機構、いってみれば永久機関として作図する。そこではあらゆる社会的矛盾が解決されているがゆえに、悪徳の発生する余地はない。万人は一人のため、一人は万人のために奉仕するかの崇高な公共心のみが支配するのである。再洗礼派ゲマインデにおいても然りであった。それは「キリストを頭とし信徒を各肢体とする一個の完璧な身体」として語られていた。ところで実験室的精密さをもって構築された人工国家ユートピアは、一切の攪乱要因を排除しつつ全機関を命令一下正確に運転していくためには、唯一人の最高指導者の指揮の下におかれた巨大なオリガーキー的ヒエラルヒーを必要とする。

『ユートピア』では、最下層では各 familia (疑似家族) をがっちり握る各家長から始まり最高のプリンケプスに至る下から段階的に構成された統治者たちが全権を掌握する。『太陽の都』では「形而上学者」ソルと三人の最高顧問官ポン、シン、モルが全権を握り、その下に膨大な官僚群が立っていた。美德の一つ一つにさえ、それを最も良く実行したものが、その監視人となり、違反者に制裁を加えた。エタティスト的ユートピアは徹底した管理社会なのである。『太陽の都』では家族も徹底的に解体され、親も子も兄弟姉妹も知ることなく、生殖行為と育児・教育は国家的事業として行われる。

フッターの下ではカリスマ的支配が行われていたが、彼の別離とその後の再建からは、寡頭制的ヒエラルヒーがアーモンの下で確立し、財産共有制を円滑に運営し、地上における「神の真のゲマインシャフト」の純粋性を確保することとなった。この点では他の再洗礼派ゲマインデとは明白な対照をなしている。彼らは自発的結社として信徒団が説教者や長老を選出し、不適格な役職者や平信徒を破門したが、そのためくり返し分裂し、遂には様々な小グループへと没落していった。辺地に逃れたメンノー派（これもまた分裂したが）を除いて、彼らはほとんど何の意味ももたないしばしばアブノーマルな「カリスマ的人物」とごく少数の追随者から成っていた。もしフッター派が自発的結社として再組織されたとしたら、モラヴィアにいた多くの他の再洗礼派と同様に、四分五裂し無意味な存在になったことであろう。

フッター派ゲマインデの最頂点にはノイミュールにある Hauptbruderhof から全ゲマインデを統治する終身の最長老 (Vorsteher, Bischof) が立っていた。彼を補佐するものとして数名の長老が常設顧問として役割を分担していた。最長老が死ぬと、常設顧問たちが互選で中間の一人を選び、各ブルーダーホーフの代表者たちを集め、彼らの歓呼賛同によって最長老となった。この選挙手続に異議を唱えるものはいなかった。最長老はモラヴィア領邦議会に対しゲマインデを代表して交渉し、用益賃貸借契約に署名した。南東モラヴィアには数十の Bruderhof があり、それらは平均約二百から三百人の老若男女の信徒の共同労働と生活の場であり、彼らを導く者として Diener des Wortes (説教者) と Diener der Notdurft (執事) がいた。両者は共に長老とも呼ばれた。前者は神の言葉の説教者で、Bruderhof の最高指導者であり、兄弟姉妹に対して破門権をもち、彼らの紛争を裁いた。彼の地位はいわば修道院長に相応していた。執事はこの Hof の物質的生活に責任を負っていた。この二人とも Bruderhof の全員によって選ばれたのではない。最長老が常設顧問会議で相談のうえ指名したのである。だから各ブルーダー

ホーフは自立したゲマインデではなく、ゲマインデを構成する一単位と見なされていた (CC 251)。説教者や執事に欠員が生じたとき、そのブルーダーホーフの信徒が選ばれるとは限らない。しばしば他のホーフの者を最長老は指名した。説教者や執事はしばしば転勤させられた。ゲマインデ全体にかかわる特に重大な案件を決定する場合、最長老は各ブルーダーホーフの主要メンバーを召集したが、この場合も歓呼賛同で決められた。従ってこの会議自体が討議決定の場ではなく、オリガーキー最高機関の意志の受領とその実行を励ます場であったのである (AC. 722)。

この寡頭制的ヒエラルヒーの最末端の職制として様々な責任者がいた。臨時の農業労働に人を割り振る Weinzierl (AC. 434, PL. 100)。手工業や生活物資の原料を外注したり市場で購入する Einkäufer, ワイン蔵の責任者である Kellner などである。各仕事場には職場長がいて Handwerker や職人, 従弟を指導した。職場長は製品の一部をゲマインデに引渡し, 他の一部を市場で売り, その代金は一週間以内に執事に引渡した。職場長が市場で製品を売るのは, 製作者自身が最もその物の価値を知っているためである。ゲマインデの外で領主たちのために働く建築労働者や大工, 水車屋などを監督する Vorarbeiter もいた。『ユートピア』や『太陽の都』と同じく, ここでも役職者の比率は高かった。フッターは「出エジプト記」18章の千人長, 百人長, 五十人長, 十人長任命の例をもって, この支配のヒエラルヒーを弁証した。もし各ブルーダーホーフが自己決定権や多数決原理を要求したとしたならば, 財産共有制は忽ち崩壊したであろう。

#### IV

『ユートピア』における共産主義経済は首都アマウロートウムに各都市から3人ずつ派遣されてきた元老たちの会議で計画され, 部族長や家長が遂行

の責を負うた。『太陽の都』では占星術的法則に基いた共産主義的生産が「愛（モル）」によって計画され、神官君主「太陽（ソーレ）」の承諾の下に「教師たち」が遂行の責を負うた。

『ユートピア』では労働から解放された400人の学者身分の者がいたが、ここでは長老と病人を除いてあらゆる兄弟姉妹が労働義務を負うた。割当てられた労働を避けたり自分の気に入った仕事を選択することは禁止された。信徒たちがひじょうに熱心に労働したことはよく知られている。例えば、織女たちは冬中朝四時起きして働き、夕方は八時まで頑張った。他の信徒たちも朝早く起き一日の仕事に取りかかった。ノルマは夜業しても完遂されなければならなかった（KW97.99）。ほとんどあらゆる観察者は驚くほどの彼らの労働意欲を指摘している。モアやカンパネッラの場合も、人々が熱心に働いていると書いているが、労働自体が目的ではなかった。それは学芸を学ぶというユマニスト的理想追求のやむをえざる手段であった。だから労働時間は4時間とか6時間ですまされた。だがここでは労働は信徒たることの身分証明であった。「倦むことなき熱心によって、誰が真の兄弟であるかを知る」（KW97.99）。彼らはまさしくセクト的な信仰の相互の確証という強迫観念によって駆りたてられていたのである。さらに教養や学問というものは、彼らにとって民衆を欺き抑圧する手段であった。神の民のためにする労働のみが神への真の奉仕と考えられていたのである。

モアやカンパネッラのユートピアでは、全生産領域の中で農業が最も主要な地位を占め、そこに労働力が集中的に投入されたのに対して、ここでは手工業が主たる生産部門であり、農業は二次的意味しかもたなかった。この世から隔離した「神の子の真の共同体」を樹立するためには完全なアウトルキーを志向すべきであったが、それは次の諸理由から不可能であった。第一に多くの信徒は農村手工業者出身であり、指導的立場は殆ど彼らによって占められていた。第二に時とともに多くの農民がやって来たが、彼らも手工業を学

ぶことを欲した。実際かなりの者が、「モラヴィアに来たらもう飢に苦しむことはないし、手工業も学べるのだ」というオルグの言葉を信じてやってきたのである (CC. 283)。彼らの期待を無下に断るわけにはいかなかった。だが第三に決定的なことは、土地を貸した領主たちの苛斂誅求である。フス戦争で荒れ果て放置されていた土地を、彼らはそれなりの安い値段で貸していたが、しだいに味をしめた彼らは、再洗礼派が vogelfrei の身であることにつけこんで、年とともに、10年に10倍も値上げしていった。地代不払いで対抗すると、家畜を強奪し、兄弟たちを投獄して脅しをかけてきた。実際、年代記は毎年その無法ぶりをこと細かに描き出している。フッター派が取りうる唯一の手段は、別の領主の土地にブルーダーホーフを移すことであった。その数は確定できないが、ひじょうに多いことだけは確かである。このような状況の下で、農業を主たる産業部門とすることは不可能であったのだ。

他方、手工業ではフッター派は大いに利益を上げた。第一に、手工業原料はノイミュールの最高指導部が外国にある原産地から一括購入することで、ひじょうに安く手に入れることが出来た。第二に、このスラブの地では、彼らの技術に対抗できるような手工業は存在しなかった。第三に、現在残っている手工業製品の多くはかなり高級な奢侈品で貴族向けのものである。庶民の日用品は少ない。周辺の田舎町や農村の人々の購買力がドイツと比べてひどく低く、日用品を作ってもほとんど利益があがらなかったためであろう。それでもブルーダーホーフ周辺 5~6km にわたって、土着のすべての手工業経営は姿を消してしまったと、ジェズイットのフィッシャーは憤慨している (F II. B1)。フッター派は没落する民衆になんの同情ももたなかった。「エソウがヤコブに嫉妬しているのだ……彼らはいつもワインを呑んで寝ころがっているのだ」(AC. 439)。

フッター派財産共有制が確立してから 17 世紀の初頭に至る数十年間は、まさしく彼らの黄金時代であった。1600 年の年代記には誇らしげにこう書

かれている。「この異常な物価騰貴と飢餓の苦しみの中で常に自分の民のことを最もよく考えて見捨てようとする全能の神は、また十二使徒の大いなる熱意と用心をもって、この世の必需品についても他の民よりも先に祝福され、用意され、適切に見守って下さった。そしてその民とこの世との間に大きな相違と区別とを設けられたのである」(AC. 602)。

フッター派共産主義ゲマインデは16世紀のヨーロッパの私有財産制の大海の上にそびえ立つ信仰と愛と繁栄のユートピア島であるかに思われた。

## V

モアは『ユートピア』の中で「どこに行ってもプライベートというものは無い」と書き出している。エタティスト的ユートピアにおいては実際私生活の余地は殆ど存在しない。これに対してアナキスト的ユートピアでは私生活ばかりで公生活が成立しない。前者のユートピアでは、あらゆるメカニズムを正確に作動させていくためには、前もってあらゆる攪乱要因を排除する必要がある。ことに必要なことは、このヒエラルヒー的メカニズムの各部品として、各構成員からあらゆる自由を剥奪(但し、最高指導者を除いて)しなければならない。かくすることによって、「蜜蜂の巣」や「精巧な時計」は良く機能することができる。美德とはこの自己剥奪を内面的に支えるモラルエネルギーにほかならない。ヒューマニズムと寛容を主張するはずの『ユートピア』においても、ユートピアの論理そのものによって、私生活の領域は極度に狭められる。例えばキリスト教の基本信条たる魂の不滅、神の摂理、死後の賞罰を信じないものは市民資格を与えられず、不倫の男女は厳しい奴隷労働で罰せられる。再犯は死刑。婚前交渉者には結婚禁止(US. 98. 83)。誰でもどの家にも入れるよう鍵はなかった(US. 52)。旅行には特別の許可を必要とし個人ではなく組をつくって行くこと、もし勝手に誰かが市領の外

に迷い出たら脱走者として厳しい処罰を加えること (US. 63)。またユートピア島民は二年に一着の制服だけが与えられ、これ以外のものを着ることは許されない (US. 58)。一切のプライバシーが奪われるところ、羞恥心も消滅する。長老夫妻のとりもちで行われる見合では、男女は全裸となり相手の体を調べた。結婚後相手の体に対して不満をいいたて離婚の口実にすることを避けるためである (US. 28)。

『太陽の都』では私的領域は完全に消滅した。結婚もなければ家族もない。「所有という概念は人々が家をもち妻子をもつことから生じる。そこから利己心が生じる。もしわれわれが利己心を放棄するならば、共同体に対する愛のみが残る」(US. 123)。ではどうすればよいのか。占星術に基づく性交の国家管理である。「それによって同じ年の子どもは徳性においても性向においても殆ど同じであり、そのためにこそこの都の中では常に調和が保たれ、人々は互に愛し合い助け合うのだ」(US. 133)。

フッター派でも一切の私的所有は否定された。新参者は土地家屋その他一切合算を売り払って来たが、その一切の金銭ばかりか日用必需品も差出さねばならなかった。その代りに着物、シーツ、毛布、剃刀などを受取った。着物は当時の南独やチロルの質素な農民服であった。「彼らの国籍は天国にあり、天の飾りをまとわなければならないからである」(RR. 134)。夫婦には小さな個室が与えられたが、そこにはベッド一つ、おまる一ヶ、タオル一枚しかなかった (CC. 262)。早朝から夕方晩くまで食事と休憩時間を除き上役の監視の下で熱心に労働した。冗談やエロティックな比喩は厳禁されたが、当然のことながら守られなかった (JE. 13)。外出は稀にしか許可されず、世俗の者と喋ることは厳禁された。そもそも彼らはモラヴィアの言葉を学ぼうとはしなかったのである。ダンスや遊びも厳禁された。唯一の楽しみは讚美歌の斉唱であった。訪問客はその一挙手一投足が監視された (HW. 1107)。背徳行為の発生する余地はないはずであったが、それでも労働サボタージュ、

姦通、猥褻行為、恋愛、セクハラ、喧嘩、口論がしばしば生じた (JE.5.13)。ブルーダーホーフの主棟は小さな兵營のような外観をしており、一階に独身男女別の集团的寢室、幼児部屋、台所、食堂等があり、二階と三階には夫婦の狭い個室がずらりと並んでいた。役職者たちの夫婦用個室は同じ棟だが壁で仕切られた独立空間の中にあった。この兵營風の主棟に数百人がつめこまれて生活していたかぎり、様々な問題が起らないはずはなかったのである。問題を起した者は礼拝の時、説教者に厳しく批判され、罪に応じて、挨拶ボイコット、ベッドや食卓からの排除、破門 (ゲマインデからの追放) が行われた。刑法に反する場合にはゲマインデが地下牢をもち、そこに投獄した。モラヴィアの領主から都市法上の特権を与えられていたと思われる (GB. 446. 492Anm1. WM IV. 15)。

#### 指導者特権

「一にして共同なるものは純粹であり、私のものお前のものは不純である」として私有財産を放棄したにもかかわらず、指導者たちはそれぞれの地位に応じて特権を享有していた。これは脱退者、訪問客、イエズス会士たちが一致して語っていることである。最長老から説教者、執事に至る高級管理者層は労働義務を免れていたが、『ユートピア』の学者身分のように研究ばかりしていたわけではない。次々と生じる対内対外問題の処理に取り組んでいた。鍊金術に熱中していたある説教者はブルーダーホーフの集会でなん度か批判され、遂に破門されてしまった。彼ら指導部の最大の特権は、平信徒たちが出入できない個室で、彼ら同志がいっしょに食事することであった。ある脱退女性はこういっている。「最長老はいつも特別のものを食べており、聞いたことだが、八人くらいが特別室にいる」(MW. 95)。長老たちは外出には幌馬車を用いた。平信徒は勿論徒歩だったが。最長老たちの権威は絶大であった。ある脱会者が郷里に帰った時、裁判官にフッター派はお上に服従しないのかと聞かれて、真面目にこう答えた。「われわれのところでは最長老がお

上です。彼らは特別な服を着て、特別な食事を食べ、長いマントをまとい、丸い帽子を被り、あらゆる種類の手工業者を部下にもっています。悪いことをするものは破門し口もききませんでした」(BP. 272)。確かに長老や役付は、平信徒から見れば贅沢な食事をしていた。彼らは「焼き肉にソースをかけ、鶏肉や魚も喰べワインを呑んだ。だが平信徒はそんなことはできなかった。大麦と蕪とキャベツと酸っぱいビールで我慢しなければならなかった」(JE. 10)。

最長老の大きな権威を最初に説いたのは、最長老ヤコブ・フッター自身であった。1532年裁判官の前で南チロルの信徒はこのべた。「集いが終わろうとしたとき、最長老フッターはこういった。お前たちは互いに平等である。教会や世俗のお上などのいうことをきくな！ 救いへの道を示す最長老のいうことだけをきけ！ 彼を諸君たちのお上と見なし彼に従え！」(ÖR III.73)。フッターの権力慾だけでなく、戦場のような迫害状況ついで財産共有制の鞏固な支配のメカニズムの確立が、指導者層の権力集中と特権化を生み出したのである。彼らの権威はゲマインデの年代記にも反映している。それは殉教者たちや指導者の指名と死の記録簿の如くにも見える。

だが更なる要因もある。指導部選抜法である。指導部は平信徒の中に生まれながらにして勇気があり政治的知的能力が高いものに眼をつけていた。彼らに情報と訓練を与え、使徒として南独、スイス・オーストリアに信徒獲得のため送り出すのである。それは恐るべき危険を伴い、多くの者が逮捕され、処刑された。よく苦難に耐えて多くの改宗者を連れて帰った者は英雄視され、執事や説教者の地位が与えられた。かかる実績のため、長老たちに対する不満はあるものの爆発することなく終わった。不満分子に対してペーター・リーデマンは、第一コリント書第九章を引用しつつ長老たちの二重の榮譽を説いて説得することができた(AC. 217)。説教者がセクハラや傲慢不遜な態度で信徒たちを扱い続けると、ブルーダーホーフの信徒は信徒集会を開き、最長

老たちを呼んで追求し、破門に追いこんでいった。

ブルーダーホーフの下士官クラスになると抑圧移譲の陰微ないじめが普遍化していたように思われる。役職としてはブドウ酒蔵を管理しているケルナーや、時には国王に呼ばれるほど名声を得ていた床屋兼外科医が、大きな役得をえて皆のあこがれの的になっていた。ケルナーはこっそりワインを抜いてお気に入りを与えた。だが気に入らない下っ端の者が来て、「ワインを一口のんで元気になりたいのですが」と頼むと、ケルナーはこういった。「兄弟よ、そうしょっちゅう来るなよ、お前の肉を十字架にかけたまえ！ 呑み食いのためにここに来ているんじゃない」(MW. 95)。

ユートピアには特権はないはずである。だが『ユートピア』にも『太陽の都』にもこのこと同じく指導者の特権があった。前者では学者だけが労働から解放されただけでなく、公職に選出された(US. 57)。都市統領、最高聖職者、部族長統領、外交使節には特別の考慮が払われた(US. 61)。後者においても、「官僚たちは一番よい食事をもらおう」(US. 129)。政治的知的能力の高い指導者は肉体労働をしないで一番いい食事にあつつき、最も苦しい肉体労働をする者が一番貧しい食事を与えられるという人類学的常数は、どのユートピアにも貫徹していた。勿論ここフッター派においても。人々がユートピアに期待する所以は人類学的常数と対決することにあるはずだが。

#### 夫 婦

『ユートピア』での結婚は生涯にわたって固く結びつけることにあった。だからあの奇妙な見合いもあったし、姦通者は奴隷の地位に落された。堅実な夫婦が国家の基礎とされたからである。『太陽の都』では夫婦は存在せず、性愛と性交は隔離され、生殖は国家管理の下に行われた。夫や妻や子をもつことはエゴイズムの源泉と考えられたからである。フッター派の場合、性愛はゲマインデに対する愛にしばしば敵対するものと考えられた。若い男女が激しく愛し合うならば、彼らのみの世界を求め、結果的にはゲマインデから

の脱出になろう。さらにゲマインデには多くの夫や妻を迫害で失ったり離別して来た信徒たちがいた。彼らのいわゆる「不品行」が発生するのをいかにして防ぐか。まずとられた措置は、恋愛が発生しないよう食卓においても礼拝式でも男女を別々に席につかせることであった。異性との共同作業は極力避けさせた。だがこれだけですますわけにはいかない。婚姻は個人的選択に委ねるべきではなく、ゲマインデの事業として行わなければならない。かくして年二回男女の結婚希望者を集めた巨大な見合が行われた。一室に男女三人ずつが向い合って立たされ、立会人の長老に直ちに結婚相手を決めるよう求められる。決めかねていると、すぐに説教者が「靈感」で、「神が彼らのため予め決められていた者」(RR. 97) 同志を結びつけることになる。それがいやならまた半年待たなければならない。フッター派の理論家リードマンはいう。「主が彼に送り給うたものが、若かろうと老いていようと、貧乏であろうと豊かであろうと、摂理を通じて贈り給うたものとして感謝して受取らなければならない」(RR. 98)。神が定めた相手だという長老の言葉は強制ではないにしても、逆らうのは難しかった(HW. 1107)。かくしてまさしく対角線的な結合ができた。若者と老女、年寄りと生娘、美男と醜女、醜男と美女。この奇妙な取合せも性愛を最小限化させ、信徒にゲマインデだけを愛させるという点では目的合理的であった。夫婦の存在は許容されたが、不品行を避け子どもをつくるという純粋に性的関係の意味においてである。従って厳密な意味では夫婦ではなく、一對の生殖単位であったと言えよう。実際、朝早く起きてから夜遅く眠るまで、夫婦は別々に働いていたし、出産の時も病気の時も見舞うことを許されず、ただ真っ暗なベッドの上にいっしょにいた限り、容貌、性格、趣味、教養など問題にはならなかったのかもしれない。

### 育児と教育

夫婦の間と同様、親子の間も極小化された。ゲマインデがあらゆる育児と教育を引受けた。産室で産まれるやいなや赤ん坊は授乳以外には寡婦たちの

部屋で育てられた。その後二・三歳まで夜は両親の部屋で眠った。この時はじめて家族が誕生する。もっとも昼間は労働の合間をぬって授乳の時しか母親は来れなかった。離乳後、子どもは各ブルーダーホーフにあるクライネ・シューレ（寄宿舎）で育てられた。この時はじめて親子の間は決定的に切離される。父親は嘆息をつき、母親は涙で枕を濡らす。幼児は母親を求めて泣き喚いた。長老たちは進んで子どもを差し出すように、さもなければ強制的に連れて行くことになるかと母親を説得した。許可なくして子どもに会いに行くことも散歩に連出すことも禁じられた（KG. 534）。被造物的執着心を断つためであり、また他の親たちの心を疼かせることになるからであろう。読み書きが学べるようになる5~6歳から子どもたちはグロース・シューレに収容される。それはどのブルーダーホーフにもあるわけではなく、いくつかのそれにひとつしかなかった。従って親子の間では第二の決定的分離となった。親が面会に行くには特別の許可を必要とした。多くの子を連れてモラヴィアまでやって来た親から子どもたちは引き裂かれてばらばらに他のブルーダーホーフの学校に入れられた（HW. 185. BP. 272）。これは新参者にとってショックであった。他のブルーダーホーフに入れられた子どもを許可なく連戻した母親は破門された（HR. 315）。脱退してきた信徒たちの尋問記録は Täufer Akten の中に散見されるが、脱退理由として主として述べられているものは「五人の子どものうち四人取られてしまい大きな心の苦しみとなった」（z.B. HW. 1865）からである。脱会者や破門された者は、寄付した一切の金を返却されぬばかりか子どもたちを放置して帰らなければならなかった。そもそもその子どもが数十もあるブルーダーホーフのどこにいるのか、生きているのか死んでいるのかさえ長老は教えなかったのである。墓には墓標もなかった。天国にいつているのに余計なものはいらないのだ。

フッター派の学校は自明のことながら宗教教育が主で、「この世」の知識や技は最小限に止められた。グロース・シューレでは男子は読み書きを学ん

だが、女子は主としてお祈りを、そして少しばかり書くことを学んだだけであった。彼女らは冬は5時起きで糸紡ぎをやらされた。男子は6時起きであった（SD.18）。「神の選ばれた国」では性差別はことにはなはだしかった<sup>(1)</sup>。

財産共有制の学校制度が始まるや否や二つの深刻な問題が生じた。一つは驚くほど高い幼児死亡率であり、他のひとつは鞭の乱用である。中世においては幼児死亡率はどこでも高いがフッター派の場合は異常である。勿論その統計はないが、多くの脱会者は自分の家族の悲しい物語を告白している。「ピルヒナーの妻はあちらに行ったとき、子どもたちを取られた。それを学校で発見したが、彼女の他の四人の子どもは、行って6～7週間のうちに死んでいた」（ÖR III.520）。「ハンス・ブラウンは妻と四人の子どもをつれてモラヴィアに行ったが、三人は死に、一人は学校にいて連れてこれなかった」（HW.186）。高い死亡率の原因の一つは、多くの子どもが大部屋にぎっしりつめこまれ、「背丈に応じて二人ずつ同じベッドに寝かされていたことである」（HW.1106）。このため家にいて母親の下で育てられていたら罹らなかつたはずの伝染病に容易に感染してしまった。ルター派神学者たちは1577年にこの問題を捉えて厳しい告発状を發した（HW.161ff）。もし長老たちが適切な改善措置を講じなかったら、親たちはゲラッセンハイトも忘れて興奮し、学校を破って子どもを連れ戻し、その結果「Eigennutzの根源」たる家族が復活し、財産共有制は解体されることになるかもしれない。指導部は慌てた。翌1578年最長老Walpotは学校規則を補足した。その中心は伝染病に対する予防措置についてであった。その主眼は病気の子を徹底的に隔離すること、不潔な子に触れた手を洗いもせず健康な子に触れないこと、清潔な子同志また不潔な子同志を同じベッドで寝かせること。麻痺している子や梅毒にかかっている子どもの服やシーツを、他の子のそれと一しょに洗濯しないこと、櫛の使用注意等々である（SD.22）。16世紀の低い医学水準からするなら彼らの努力をかなり高く評価してもよかろう。だがユートピア

的共同生活が多くの子どもの死を招いたことには変らない。

この当時、ラテン語学校では教師から、家庭では父親から子どもたちはしゅっちゅう答をうけた。絶望に落入ることから母の愛が彼らを救った。だが二歳過ぎからここには母はもういない。子どもは孤独の中に放置された。男の校長、女の管理責任者、シュヴェスター、保母、夜勤保母たちがいたが、百人くらいの子どもの監督者として働いていた。「わが子のように愛せよ」と命じられても、こんなたくさんの子どものをどうやって導き、混乱こそが身上の彼らにユートピア本来の「秩序」を与えうるのか。しばしば怒りを爆発させた彼や彼女らは鞭をビシビシと用いた。1568年と1578年の『学校規則』を見ると、「夜泣きする子をしたたか打ち」(SD.20) また「ちょうど家畜の群れを行くごとく、子どもたちの間を行くとき、急に怒りだして鞭で彼らを片端から打ちすえていく保母がいる」(SD.6)。子どもたちも黙っていなかった。「鞭に向かって挑みかかって行く子もいる。だが自発的に叩かれるように馴らしていかなければならない。彼らが抵抗しないようもっと優しく取扱うことができる。もっとも抵抗はいかなる場合も許されない」(SD.16)。

#### ユートピアの崩壊

1588年の『学校規則』になると親子関係の復活、小さいながらも私有の復活が見られる。「自分の子どもに与えるためにワインを学校にもってくる者は、それについて釈明しなければならない……自分の友人の子供に名指しで飲物を与えてはならない。えこひいきをしてはならない」(SD.34)。自分の子どもとところで勝手に訪問してよいのだろうか、ワインはどこから手に入れたのだろうか。「食事は公平に分配されなければならない」(SD.36)とあるが、不公平な分配をする者がいたのだろうか。「子どもが学校から勝手に外出してあちこちぶらつき、ある子は隠れる秘密の場所をもっているとのことである。なにか起こったらどう釈明するつもりなのか」(SD.36)。「外部の者が学校に来た時には、学校教育や両親たちの名誉になるよう静かに感

じよくさせなければならない」(SD. 36)。「子どもが学校でおできや発疹に罹っても、校長はほとんど責任を負おうとせず、他人に責任を押しつけている」(SD. 42)。「子どもを学校から毎日連れ出し、吐いたり下痢したりするほど食べさせている人々がいる」「毎日多くの子が親に勝手に連れ出され、学校に残っている者は孤児や身寄りのない子ぐらいのものである」「教師たちは子どもたちが学校から出ていく自由をあまりに多く与えている。そればかりか遠く野を越え両親のところに行かせている。裏になにか利得があるのだ」「子どもを自分のベッドに寝かせつけその子が眼をさましたら屁理屈をつけて外出し、この世の人々と並んで散歩している者たちがいる。こんな連中はこの世でも満足な生活ができなかった奴らだ。彼らは率直に肉に返ろうとしているのだ。以前はひどく恥かしいことだったのだが。」「学校で贈物として受取られた金銭は執事に手渡されなければならない」(SD. 44. 46)。

一銭ももたないはずの信徒たちが、どこで手に入れたのか、教師に付け届けしだした。1569年冒頭の引用に見られるようなすばらしい自画像を描いたフッター派ゲマインデは、20年もするとこの様である。この間大した変化は生じていない。しだいに豊かさを増しているだけである。モラヴィアを取り巻く政治状況は安定しており、激しい弾圧も起っていない。信徒の緊張感がしだいに失われていったのだ。そしてユートピアの教育システムの重圧に対して人間の最も根源的な本能が盲目的に動きだし、教育システムをはじめとして既存システムを融解させ機能麻痺に陥れていったのである。

ではあのユートピアの配偶システムはどうなったのであろうか。資料の中にそれはなかなか出てこない。やっと現れてくるのは崩壊寸前の1643年フッター派ゲマインデを過去の厳格な財産共有制に戻そうとして最長老エーレンプライスが発した結婚規制に関する布告である(KG. 214-18)。それによると、「恥かしげもなく老人ばかりか若い男女までが、友人や知人の仲介を通じて互いに結婚を申し込んでいる。彼らは……手紙やメッセージを家から家

へと送ったり、贈物や好物を届けている」(KG. 214)。そして示しあわせたカップルの組々が、結婚集会にやって来て、長老が「神の摂理」に従って組み合わせるより先に相愛の相手を指し示すというわけである。パートナーの組み合わせをした結婚ブローカーは、もちろん金をもらっている。

『1661年のゲマインデ規則』を見ると、人々は自由勝手に振舞い、規律は乱れ、財産共有制は彼らのつまみ喰いによってガタガタになっている。ユートピア崩壊現象はここにおいても20世紀の80、90年代ソ連でも同じ様相を呈しているように見える。例えば、「窓・ドア・鍵・ベッドの枠組み・椅子・ベンチはベッドルームに置いていなければならない。……様々な理由でこれらのものを持ち出すことは禁止されている。」「執事と分配係はなにも持ち出されたり、消えないように熱心に見張らなければならない。後で自分の金で買うことになるから。」「毛皮、帽子、皮屋その他の職人はゲマインデの人に売ってはならない。必要に応じて分配すべきである」(KG. 527)。「神の民」は遂には「我欲にかられて共同の財産を手づかみにし、着服し、たくさんの車で運び去った。彼ら多くの者はもはやいかなる良心もなくなり、鋼であれ鉄であれ皮革であれ木綿であれ麻布であれ大麻であれ羊毛であれ、要するにゲマインデがもてるすべてのものを自分のものにしようとした。」(KG. 521)。

1654年の「床屋外科医規則」第11条によると、「今やある者たちはゲマインデの服を着ることを恥じ」「世俗の服装に近づけようとしている。」第16条によると「仕事を避けて、自分にそんな仕事はふさわしくないと考えている者がいる」(GB. 485)。神の民であるという誇りはすっかり失い、世俗に同化されたい一心であることが知られよう。財産共有制の解体凋落は静かにゆっくりと進み、1685年の年代誌はいとも簡単にこう書いている。「ひどい困窮に襲われたので、われわれは醸造所、畠、牧場を返し、改めてお上と各人々が契約し、それぞれ自前で支払いたいと申出た」(GB. 549)。幼児洗礼拒否はなお続いたが、1733年国王の命令で放棄し、やがてハンガリー

のフッター派は全員カトリックに強制改宗させられた。ジーベンプルクに逃れたごく一部のグループが上部オーストリアから逃れてきたルター派と結びつき、ルーマニアついでロシアへと逃れて財産共有制を再興し、現在アメリカ、カナダの奥地に広く分散してブルーダーホーフを構えているフッター派の源流となる。

## VI

以上の記述から引出しうるいくつかの結論の一つは、ユートピアは逆ユートピアだということである。エタティスト的ユートピアは表から見れば燦然と輝く秩序と調和の美を示し、恰も一糸乱れぬマス・ゲームが展開されているかに見える。だがひとたび内側に入ればその機関のネジや釘と化され、ただ黙々と働かされている人々に出あうだろう。彼らはこのシステムが人間集団にとって最もふさわしく、どんな非合理きわまりないことであっても最も正しく、自分にとっても価値あることだという信念をビルト・インされて、日々それを斉唱しながら、ますますその信念を固めていく鉛の兵隊なのだ。このようなエタティスト的ユートピアは本来的に支配者の願望像なのである。時計仕掛のように蜜蜂の巣のように、正確無比に自分の作製した国家が回転していくことを彼らは望んでいるからだ。プラトンから始まりモア、カンパネッラ、モレリさらには20世紀の実現した社会主義ユートピアの製作者たちは、すべてこの系列に属している。フッター派ゲマインデもまたその傑作の一つであった。

だが19世紀末からしだいにこのことが明らかになってきた。支配者にとっては楽しい頑具だが、中に組入れられて働かされる人民にとっては、まさしく悪夢の世界ではなかるうか。これまでユートピア作家は、支配者の視点からユートピアを書いてきたが、今度はそのシステム内で呻吟する民衆の視点

から描き始める。するとユートピアは逆ユートピアのどぎつい相貌を曝けだしてくる。

要するに、ユートピアは上から見れば壮麗である。だが下から見れば怪物の姿をむきだしてくる。さらにユートピアは完璧なるがゆえに、年々歳々同じ運動を繰返し、永久機関のように壊れることなく不動であるように見えた。だが物象化され員数化されネジや釘のように部品化された人間もまた金属疲労を起し、たとえ心はユートピア王を尊敬しつつけても、生きんとする本能はしだいにユートピアの厳格な規律を次々と破り、システム自体をついには空洞化させ崩壊へともたらすことになる。山上の説教を実行させようとして、様々な精神的圧力や、人々から生活の資を奪い野垂れ死にさすような破門の手段をもって、ユートピア島を作ったこと自体に、すでに崩壊の原因が宿されていたのである。

#### 《注》

- (1) フッター派の性差別については、次の論文を見よ。

Wes Harrison, *The Role of Women in Anabaptist Thought and Practice: The Hutterite Experience of the Sixteenth and Seventeenth Centuries*. "The Sixteenth Century Journal" XXIII/1 (1992) pp. 49-69

#### 省略記号

- AC. — Hrsg. von Zieglschmid, *Die Älteste Chronik der Hutterischen Brüder*, 1943  
 KG. — Hrsg. von demselben, *Das Klein-Geschichtsbuch der Hutterischen Brüder*, 1947  
 GB. — Hrsg. von J. Beck, *Die Geschichtsbücher der Wiedertäufer in Österreich-Ungarn*……Rep. 1967  
 HW. — Hrsg. von G. Bossert, *Quellen zur Geschichte der Wiedertäufer*, Bd. 1, Herzogtum Württemberg, Rep. 1971  
 HR. — Hrsg. von G. Franz, *Urkundliche Quellen zur hessischen Reformationsgeschichte* Bd. 4, Wiedertäuferakten 1527-1626. 1951

- BY. — Hrsg. von K. Schornbaum, *Quellen zur Geschichte der Täufer*, Bd. V, Bayern II Abt. Rep. 1972
- BP. — Hrsg. von M. Krebs, *Quellen zur Geschichte der Täufer*, Bd. IV, Bayern und Pfalz, Rep. 1972
- GZ. — Hrsg. von L. Müller *Glaubenszeugnisse oberdeutscher Taufgesinnter*, I Abt. Rep. 1972
- GT. — Hrsg. von R. Friedmann, *Glaubenszeugnisse oberdeutscher Taufgesinnter*, II Abt. 1967
- RR. — P. Ridemann *Rechenschaft unsrer Religion*… Rep. 1962
- ÖR (II, III).—Hrsg. von G. Mecenseffy, *Quellen zur Geschichte der Täufer*, Bd. XIII, XIV, Österreich II, III, Abt. 1972, 1983
- MW.—J. Loserth, *Der Communismus der Mährischen Wiedertäufer im 16. und 17. Jahrhundert*. 1894
- KW.—L. Müller, *Der Kommunismus der Mährischen Wiedertäufer*, 1927
- WM (I.II.III.IV).—F. Hruby, *Die Wiedertäufer in Mähren*, ARG, Bd. 30, 31, 32, 1933, 1934, 1935
- CC. — C.-P. Clasen, *Anabaptism, A Social History 1525–1618*, 1972
- PL. — H.-D. Plümper, *Die Gütergemeinschaft bei den Täufern des 16. Jahrhunderts*. 1972
- JS. — J. Stayer, *The German Peasants' War and Anabaptist Community of Goods*, 1991
- HB. — W. Packull, *Hutterite Beginnings: 1525–1545—Storm and Stress of Early Anabaptist Communitarian Experiments* (Manuskript)
- AB. — derselbe, *Rereading Anabaptist Beginnings*, 1991
- SD. — Hrsg. von J. Hostetler, L. Gross u. E. Bender, *Selected Hutterian Documents in Translation*, 1975
- FI. — C. A. Fischer, *Vierundfunftzig Erhebliche Vrsachen / Warumb die Wiedertäufer nicht sein im Land zu leyden*, 1607
- FII. — C. A. Fischer, *Der Hutterischen Wiedertäufer Taubenkobel*, 1607
- JE. — Hans Jedelshausen, *Zwelff wichtige und starke Vrsachen Hansen Jedelshausers…Warumb er…von den Wiedertäufern…sei abgetreten*, 1587
- HE. — Hrsg. von den Hutterischen Brüder in America, *Der Hutterischen Epistel, 1527 bis 1767* vol. I. 1986
- US. — Übersetzt von K. Heinisch, *Der Utopische Staat, Morus Utopia, Campanella Sonnenstaat, Bacon Neu-Atlantis*, 1960